

編集後記

世の中には、「木を見て森を見ず」という言葉があります。この言葉の意味は、一つ一つの細かいところに目を奪われて、全体像を見ることができなくなるということです。個々の具体的なものに目を奪われては、その奥にある真実を探ることができなくなるということにつながると思います。ここでは、木という個々具体的な事実は、しっかりと見ているということが前提になっています。そしてしばしばこの言葉が用いられるときは、私たちは、木は身近なものであるのだから、当然熟知しているのだという気になっていると思います。しかし、私たちは実は、本当に木をしっかりと見ているのでしょうか。私たちは、個別の目の前のことを本当に十分に認識しているのでしょうか。ともすると、実は盛りも木も見えていないということがあるのではないのでしょうか。例えば日本文化を絶賛している人が、琴や三味線の数え方を知らないとしたら、それは実は木を十分には知っていないということになるのかもしれませんが。

この度、今回生活科学研究第35集が発刊されます。多くの方に投稿を頂いたことに心から感謝申し上げます。そしてこの生活科学研究と冠した紀要が、これだけの歴史を積み重ねてきたことを見るにつけ、「森を見て、そして木を見ることができる」ことを志すことが今後とも求められていくと思うのです。改めて自戒を込めて、森も木も見るとい生活科学の意義の深さを認識していきたいと思う今日この頃です。

なお、発刊に当たり、とても残念であったことがあります。投稿者の型の中に一部、文量・書式など執筆規定を遵守せずに投稿なされた方がいたことです。次年度以降はこのようなことが絶対無いように、事前に執筆してくださる方に留意して頂くよう促すことが編集委員会の課題と考えています。

生活科学研究所 研究部主任 星野晴彦